



新年度の挨拶

新しい診療科・総合内科

病院事業管理者 まつ 松 の 野 せい 正 き 紀



平成 29 年度を迎えます。新年度に入って新しい仲間を迎えるのはいつもながら楽しいことです。今年も沢山の入職者がありました。皆さん大歓迎です。中でも嬉しいニュースは、医局に一度に 5 名の新しい常勤医師が加わったことです。ドクターの純増 5 で、ここしばらく当院では見られなかったことです。それも全員十和田の地域医療に情熱を燃やす新進気鋭の若者です。

従来、当院は内科系の医師不足に悩まされてきました。幸いなことに、新しいドクターはすべて内科系です。待望久しかった消化器内科、循環器内科が増員され充実します。『中央病院ガンバレ』という大学からのメッセージと勝手に捉えていますが、嬉しい限りです。

もうひとつの嬉しいニュースは、他の新入ドクターを中心に新しい診療科・総合内科が立ち上がることです。これは従来の総合診療科に代わるものです。

わが国の医療制度や医学教育の流れは、先端技術等を追い求める専門性に偏ってきたきらいがあります。その反省から家庭医、総合診療医を育てる機運が高まってきたところですが、しかしながら、総合診療科とは何ぞや？とその定義も定まっていません。

当院の新しい総合内科のスタッフは、外傷も含めた幅広い領域の患者に対する初期対応も十分可能な「救急内科医集団」を目指しています。その切り口で総合診療を行う、これまでとひと味違った「総合内科」を確立しようとしています。これを地域に定着させ、さらに国内に広げていきたいという強い意欲を持っています。頼もしい限りです。

新しい総合内科が、中央病院さらには上十三の地域医療発展のための強力な推進エンジンになっていくことを期待したいと思います。全職員の皆さまの暖かいサポートをよろしくお願い致します。

「内固外進」そして「余韻繞梁」

院長 たんのひろあき 丹野 弘晃



いきなり四字熟語を並べてみましたが、思い当たるところがあり表題とさせていただきます。「内固外進」はそのまま漢字の示す通り「内を固めて外に進む」ということで、ある学会の方針をそのまま引用させて頂きました。四字熟語辞典にはないようですので、学会理事長の造語でしょう。まさに当院の現状にマッチしている四文字ではないかと感じています。例えば、昨年度の内固の一つに全職員で取り組んだ病院機能評価更新がありました。結果はもちろん合格でしたが、評価内容として待望のS評価（秀でている）を「患者さんの療養環境」と「放射線治療」の2項目で頂戴することができました。この点に関しては全国トップレベルであるという誇りと自信を持って、外に発信できる（外進）と思っています。

そして今年度の内固ですが、耐え忍び待ち続けていた特に医師を中心とした新しい人材の獲得があります。これが本来の組織としての内固でしょう。そこで次なる四文字である「余韻繞梁（よいんじょうりょう）」の登場です。これも実は当院院長室に掲げてある歴史を感じる木製プレートに彫り込んである文言を引用させて頂きました。十和田市立中央病院初代院長である山田明先生が刻まれた文章の題字に「余韻梁（はり）を繞（めぐ）る」とあります。余韻とは、音の鳴り終わった後に微かに残る響きとか、事が終わった後も残る風情や味わいのことであり、それが家の梁までまとわりつくという故事成語のひとつのようです。その故事を踏まえて意味を表現すると、この上なく絶妙な歌声で人々に深い印象を残すこと、となります。

今年度の当院の状況に置き換えてみると、新しく加わってくれた人材が槿木となって、当院という鐘を打ってくれています。その余韻が院内全体をめぐり、隅々まで行きわたりながら、院外へ、地域へと拡がって行く確実な予感があります。まさに外進です。それらを考えると真に味わい深い二つの四字熟語である、と勝手に思っています。当院から発せられる余韻に是非耳を傾けてみてください。今年度も何とぞよろしくお願い致します。

